

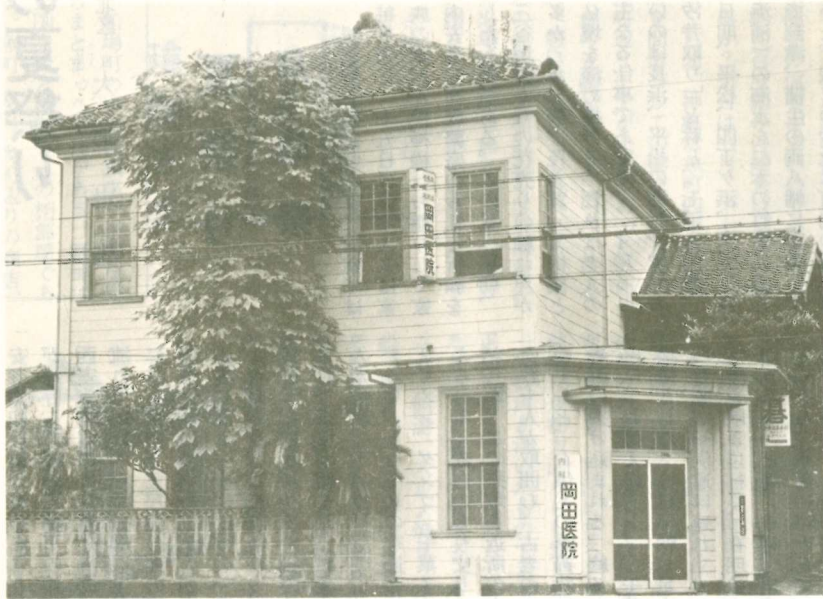
北九州市の文化財を守る会

会報

No.20 52.9.1

発行 北九州市の文化財を守る会
 北九州市小倉北区内1-1
 北九州市教育委員会文化課内
 電話 582-2389

印刷 博文堂印刷所
 北九州市小倉北区長浜町2番22号
 電話 511-1011



小倉北区室町 岡田医院 (城崎全輝 撮影)

城下街と旧家

城下町「小倉」の名はとうの昔失われてしまった。懐しい商家、旧家、由緒ある建物が、ここ一二年で殆んど見当らなくなってしまう。近代建築の荒浪は城下町を大変し、何処にもある町並と姿を替えてしまっている。先日車で確かにここにあったと思われる商家が目も緩なキャパレと表構えが変わっていた。老人の懐古趣味と云われるかも知れないが、今の内に残っている僅かの旧家、商家を調査、収録して置きたいものである。神社や仏閣、豪華な建物は先輩や関係官庁の手で完全とは云えないが収録されているが、町家、商家の記録は少ないように思われる。旧五市を各支部で、調査すればまだまだ、旧藩時代や明治時代の得難い建築物があるはずである。殊に旧城下町、小倉北区こそ、その調査、収録が重要な課題ではなからうか。何れも個人の住家であるからプライバシー問題など幾多の困難が伴うであろうが、調査、収録、写真等に収めて資料として保存したいものである。私の調査の中、数拾戸の内から二つ三つを例にとってみると、町家としては、文豪森鷗外博士鍛冶町住宅の跡。家主宇佐見マサさんの尽力で保存、明治中期の貴重な文化財的建物の一つではあるまいか。商家としては、米町四丁目、名葉鶴の子の福田屋さん。旧藩時代は藩の御用菓子。建物は明治中期、京町の火災で類焼、再建というが店構えは旧商家の代表的家屋と思われる。旧綿町の住市さん。唯一の荒物商の店構えは替えてない。洋建築では室町電車通りの岡田医院。材料はすべて樺材、門構えの柱もなつかしい。明治、大正、昭和六年三月まで小倉警察署であった。唯一の洋風建築である。旧家では上津一丁目の植村家。到津の庄屋役宅跡で、門構え、入口、敷地が代表的、家の大黒柱には明治初年の百姓一揆の傷跡も残されている貴重な建物である。町並としては遅すぎで完全な所はないが、西紺屋町の軍人将校住宅跡、室町の旅館街、紺屋町の旧家等、今の内に写真にでも撮って置きたい通りである。庶民的な町、古船場の「ドアイ(露地通り抜け)」などは大切な民俗資料ではあるまいか。

(小倉北支部長 大隈 岩雄)

バスによる文化財めぐり

第十四回バスによる文化財めぐりは、かつて近海捕鯨の根拠地として栄え、現在貴重な捕鯨関係資料を残している長門市を訪ねます。当日の説明には長門市文化財保護審議会委員の羽仁雅助先生を予定しています。

日時 九月二十五日(日)雨天決行
 参加資格 本会会員
 参加料 一人につき三千五百円
 募集人員 四十五人(先着順)
 締切日 九月十九日(月)
 申込方法 参加料添え直接事務局まで
 集合場所 若松区役所前 午前七時三十分
 出発時間 小倉駅北口 午前七時四十五分
 昼食 向岸寺で昼食をしますが、付近に食堂等がありませんので、各自で用意ください。
 帰路 小倉駅着 午後六時三十分
 ※青海島東部(鯨墓など)は大型バスが通行できないため、徒歩となります。今回は、特に脚に自信のない方は参加をご遠慮ください。

催物案内

神代岩戸神楽
 と き 9月18日(日)午後4時~10時
 雨天の場合は順延
 ところ 八幡西区大字香月石坂
 石坂町内会長 笠重三(617-5406)
 黒崎バスセンター発20番の直方行き乗車、石坂下車。徒歩5分。
 問合せ 黒崎バスセンター発20番の直方行き乗車、石坂下車。徒歩5分。
 あ し 石坂町内会が、大分県庄内町に古くから伝わる豊後岩戸神楽を招待して行うもの。
 内容 演目は「磐戸開き」「八岐大蛇退治」「神速」など十数番。
 中華人民共和国出土文物展
 と き 11月22日(火)~12月18日(日)
 ところ 北九州市立美術館
 観覧料 大人500円(400円) 大高生300円(200円) 中小生200円(100円)
 ()は前売及び20名以上の団体料金
 前売券 市内プレイガイド、画廊、画材店

見学先(コース順)

長州捕鯨用具 長門市立中央公民館に収蔵。昭和五十年九月三日国の重要有形民俗文化財に指定。
 青海島鯨墓 花崗岩造り、総高約二・二メートル。元禄五年(一六九二)建立。昭和十年十二月二十四日国の史跡に指定。
 向岸寺 鯨過去帳、鯨位牌などを見学。
 早川家住宅 十八世紀後半の建築と言われ、比較的保存も良く、全国的にも数少ない漁家の遺例である。昭和四十九年二月五日国の重要文化財に指定。
 赤崎神社染機敷 赤崎神社の御祭礼神事に奉納する民俗芸能の観覧席として発生し、現在に伝承されたもの。昭和三十八年十月二十六日国の重要有形民俗文化財に指定。
 大内義隆主従の墓所 大寧寺境内にあり、義隆以下三十三柱の墓は何れも宝篋印塔形式のものである。義隆自刃は天文二十年(一五五二)九月一日であるが、墓石の建立年代は詳らかでない。昭和四十二年七月四日国の史跡に指定。
 大寧寺秋澤重臣の墓地 大寧寺境内の墓域に萩藩上級武士の墓約二百五十余基が群立。自然石塔、板碑型、宝篋印塔、石幢型、五輪塔笠塔婆など多種多様な墓石がある。昭和四十八年長門市の史跡に指定。

刊行物案内

「史実」 維新のいしずえ」を中心としたノンフィクション。B6版、308頁、上製本
 小倉藩の著者 宇都宮泰長 鵬和出版(電03-717-4336)
 出版社 〒152 東京都目黒区八雲5丁目10-1-201号
 代金 1,800円(送料160円)
 振替口座名 鵬和出版
 口座番号 東京8-49619番
 「小倉城」
 頒価 1,500円(送料160円)
 取扱 本会事務局(残部僅少)
 「北九州市の文化財」
 頒価 800円
 取扱 本会事務局(残部僅少)
 「北九州の歴史年表」
 頒価 100円
 取扱 本会事務局(本会刊行)
 「小倉南区の古城跡」
 頒価 1セット(2冊) 600円
 取扱 小倉南支部長 中村稔徳
 問合せ 電話 962-5868

おわび

前回配布の会報十九号中、人名等に間違いがありましたので、次のように訂正させていただきます。
 ご迷惑をおかけしたことを深くお詫び申し上げます。

事務局だより

◇会報二十号ができましたので、お届けいたします。今回は小倉北支部の担当です。
 ◇次回の担当は門司支部で、発行は十二月一日の予定です。
 ◇会報充実のため、会員の皆さんの積極的な投稿をお願いします。原稿(本会専用の用紙あり)は担当支部長か事務局へお寄せ下さい。
 ◇「北九州市立歴史博物館」の入場券を同封しますので、ご利用ください。
 ◇五十二年度会費を未納の方は、至急納入くださいますようお願いいたします。(年間会費)
 一般会員千円、賛助一口一万円
 学校 千円、一般団体 三千円
 ◇第十三回「バスによる文化財めぐり」(防府)に参加の方、記念写真(一枚百七十円)ができています。事務局までお送りください。

お知らせ

氏名、住所、郵便番号、電話番号を記載した会員名簿(十一月一日発行)を作成中。
 住所など不備な点があれば十一月一日までに事務局へ。

小倉北区の夏祭り

小倉北区 大隈岩雄

昔と今

小倉北区は北九州市では唯一の城下街、従って歴史も古く、時代がかった風習が守られていた中心街でもあった。その昔、なつかしい年中行事や祭りの目ぼしいものは、今日その殆んどが廃れ、行われなくなっている。

城下街の名残から軍都小倉と称された頃までは、それでもここ彼処に古い祭りが行われていた。季節感の強い行事が各人、各家で又町内毎に、或は氏神、旦那寺を中心に催されていた。それが終戦後「国破れて山河あり」の姿で新時代思想の息吹きと共に吹き荒れ、がらがらと崩れ去ってしまった。なんだか潤いが少ない城下街となってしまった。近代建築の天守閣と石垣と濠が、や々と城下街の面影を偲ばせている。

その反面、現代的な年中行事が生まれつつあることも確かである。デパートや商店街が商魂たくましく大売出しの名の下に「何々祭り」とやたらに市民の心と購買力をおおっている。

夏祭り

月並祭

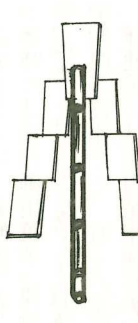
城下街では古い商家、旧家では毎月朔日、十五日には主人又は家族の誰かが氏神様へお詣りして家内安全、商売繁盛のお礼と祈願をしたものである。この日、早朝、三谷地方からの花売りの触れ声が多かった。神、花を買って神棚と仏壇を浄め捧げる。これは老人の主なる仕事であった。一寸珍らしいのは長浜、平松の漁村では「お汐井取り」と称し、七浦(中井、日明、平松、四丁ヶ浜、高浜、長浜浦)の海水を二本の竹筒に汲んで到津、蒲生の両八幡に奉納していた。残りの汐水は町内の祠に捧げるのである。旧家では夕食の時、主人公の膳には酒(二合半)が一本添えられたものである。大いの家では小豆飯が炊かれた。

水神祭

通称「カッパ祭り」ともいった。旧暦の五月朔日、紫川、板櫃川沿いの各部落毎に堤や川原で水神祭

は行われた。盛大なのは木町の西安寺の行事であったろう。紫川が蛇行して篠崎八幡下の蛇淵から西安寺淵は深く淀み、渦が巻いて流れていた。水深五尋以上、川底には、目の下三尺位の鯉の王者が悠然と泳いでいた。この西安寺淵の堤に高さ一米ばかりの一基のヌメ石があり、これを「カッパの証文石」と称され、この石の前に木と竹で祭壇が組まれ、古老や世話人が神酒、キユウリ、マクワウリ、ナスビ、トウキビの季節の初物とソーメン、ダンゴ、干菓子等が供えられる。赤白のきり交りの御幣が二本、この祭壇を近所の老幼男女数十人が取囲む。古老のお破いがすむと、お供えの季節物は西安寺淵に投げ込まれる。終ると子供達に、お供えのダンゴ、干菓子が接待された。二日早朝、足立山が白む頃、子供達は連れ立って西安寺淵を覗きに行く。夜明けの明星がきらりと消える時、川面は明るくなる。水面に浮かんでいるキユウリ、マクワウリが傷ついている。子供達は「うわっカッパが食べちよるぞ?」と叫ぶと、一斉に着物を脱ぎ捨てて、どぶんどぶん、飛び込む。朝の川水は冷たかった。この日から水遊びは自由、子供カッパの天国となった。ウリ類の傷は岩角に触れた傷跡であるが、そんな小難かしいことは子供に関係なかった。紫川も上流の蒲

生川、桜川も同じ水神祭が行われていたが、こちらの方は田の神祭りが中心であったようである。神嶽川の水神祭は段谷製材所下に白い小形の御幣が数本、水にぬれていたので、これは汐の干満の差で水没するためであったろう。ここを「ハンドガメ」と称されていたが巨大なカッパの醜名であったらしい。



天の葉一枚、塩、洗米、お祓料等を用意する。神社総代、町内会長は夏衣に縞の羽織と威儀を正し、先頭に、神主、称宜、仕丁に担がれた神輿、旗、矛、世話人数人が行列お供して家に這入る。形通り、神主の祝詞、でんでん太鼓、すり鉦、笛で賑やかな奏楽、終ると神輿は再び表通りへ、浄めの水は家の表、裏鬼門へ撤水、残り井戸の中へもぼとん、これで罪という罪はあらじと大安心。信仰とはいえ他愛ないものであった。

雨乞祭り

六月のことを「水無月」ともいう。梅雨時でありながら雨が降らない天候異変が生ずると、一番敏感な農村が先ず立上る。早魃雨乞というわけ、米が穫れなげや、米価を煽る。水道の水が足りなくなる。そこで市役所の音頭で「雨乞祭り」、各戸、町内及氏神さんの指示で、竹筒二本に響灘の海水を汲んで足立山上の妙見宮まで登り祈念する。文字通り早天、田はひび割れ、日除けの帽子、手拭も汗でびしょり、背中を流れる汗もかまわず妙見登りはつらかった。参加出来ぬ家は町内の祠に参拝させられる。町内組外しがこわかつ

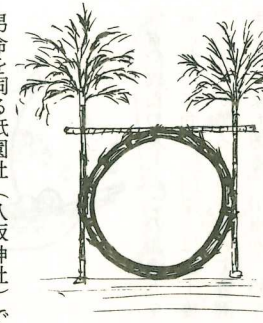


敷地祓い

城下街は紫川を挟んで東が蒲生八幡、西小倉は到津八幡が氏神様、各町内、家毎に敷地祓いの神輿がやってきた。前もって知らせが各戸に届いているので家では特に入念に掃き浄め、神棚の下、又は座敷の中央に迎接台を置く。水と南

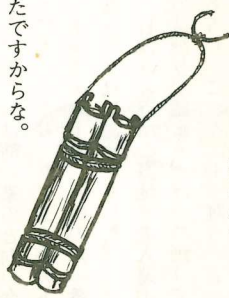
輪くぐり

正しくは「夏越祭り(なごし)」というのだそう。やはり私たちには「輪くぐり」の名がなつかしい。この夏越祭りは祭神、須佐之



男命を祀る祇園社(八坂神社)で行われたものだが、近年は市内の神社はどこでも行っている。備後風土記による蘇民将来物語りにより夏恵いせぬよう茅の輪をくぐり、人形に托して罪穢れを祓い浄める古人の智慧祭りである。「水無月に夏越の祓する人は、千歳の齢、延ぶと云う也」「さばえなす荒振る神も、おしなめて今日は夏越の祓なりけり」祭日は七月三十一日と八月朔日の二日間、家族揃って参拝、社頭の茅の輪をくぐる。材料は紫川上流か足立山のスキで造ったものだが、人形も昔は各人で紫川へ流していたが、今は各神社でまとめて響灘近く海上で流す由。

城下街は正月を除く他の年中行事や祭の多くは月遅れが多い。明治、大正生まれの世代の流れである。今では幼稚園など教育上から七月七日に行うが一般民家は何んとなくしつくりしない、八月七日の月遅れとなる。六日早朝から三谷方面の若者達が笹を売りにくる。家によっては少し太めの竹を求めた。これは七夕祭りが済んで枝祓いした後の竹は物干竿に使用するためであった。家族総動員、母や祖母はコヨリ造り、姉や妹たちは色紙の準備、輪かざり、人形、クサリ花、網かざり、家、奴、舟を造る。主に女の子の喜ぶ行事だが男の子も一日中、遊びに行かず、てんやわんやの騒ぎ。三時のおやつにはソーメンが必ず出た。黄粉団子も出る。麦茶が井戸冷やしで飲めた。西瓜も井戸から引きあげられる。夕方、行水の後、盥に水を一杯湛え、洗濯物を漬けて、そのまま一夜置く。七日の朝、洗濯しておられた。何のためかこうするか判らず大人になって母の教えで、こうするとよく汚れが落ちるのだと聞かされた。夕食後、表通りにパンコを出し、その上で遊ぶ。線香花火をしたり、挟み将棋で夕涼み、高小の生徒が「小鯛のスシ」と触れ売りにくる。母から買って貰って食べる。寝る頃には空一面



お汐井竹筒

神明祭り

正しくは「お伊勢さま」、城下町では室町三丁目、旧小倉駅左側の空地が代表、鳥居の笠石が一石造りといひ珍らしかった。現在八坂神社境内に県文化財として保存されて居る。旧暦の六月一日、二日、初夏の陽射しが、そろそろ



西台場灯籠

強くなり始める季節、祭日は常盤橋から室町通りは参拝者でごった返しの賑やかさ、境内では子供角力が盛大であった。夜遅くまで賑い、アセチレンガス灯の明りで真昼の様に見えたものである。この神明様の祭りが城下町の夏祭りのトップではなかったらうか。昭和初年頃からだんだん廃れたが、魚町、京町商店街の賑やかさに押されてしまったのが原因であったらう

住吉の夏祭り

今では八坂神社境内で関係者のみ、簡素な祭りを行っている。

市立小倉病院の西側に住吉神社が鎮座、狭いながらも簡素な神殿である。大正町、馬借辺り色町の信者が多い。朝夕は艶やかな芸者、仲居、酌婦(接客婦)のお詣りが多い。神様が水の神であるから、水商売の信者が多いのであろう。早朝に百度踏みは切ない願事か?祭日は七月二十七、八日

頃二日間、神輿は魚町四丁目の商店を間借りしての御旅所、且過、鳥町辺りまでが氏子であったのか、小倉の太鼓が、おんが済んで一と息、憩いの祭りでもあったらう。水の神様で丸和の辺りは近海魚の荷揚げ、漁船も色とりどりの美しい旗を立てて祝っていた。

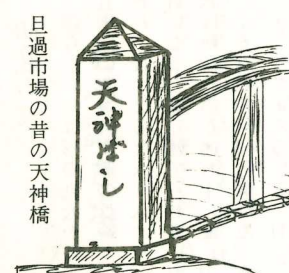
天明二年の度石



天明二年の度石

瑜珈さま

船場町の中央に鎮座、小形ながらまとまった神社がある。祭神は大國主命と稲荷さんの相部屋である。魚町、京町、鳥町辺りの商店、旦那衆の商売守護神、商工会議所



天神橋

日過市場の昔の天神橋

の銀砂子をまいたような銀河の流
れ、北斗七星、幻の夜であった。
七日の朝早く起きられる。ドンブ
リ片手に畑のイモの葉の露取り、
少ない時は、お城のお濠まで遠
征して水蓮の露取り、濠端で裸足
になり、友達と手を握り合って、
ずぶずぶと膝まで這入り蓮の葉の
コロコロした露をドンブリに受け
た。このコッがなかなか難しかっ
た。帰りは足立山の朝日すがすが
しく足下を照らしてくれた。濡
れぬ先には露をいもへ」とい
う下駄も草露でびしょりと濡れ
足先がかゆかった。家では姉や
七夕まつり



妹が待っていて早速、墨すり、短
冊に思い／＼の字を書いた。天の
川、七夕さま、いんかいさん(牽
牛星)、織女さま、これを笹につ
ると、意外に笹は重たい。表通
りの軒端に立てる、何処の家でも
同じ時刻であつたらう、一斉に立
った。七夕笹は前の家と向い合
つてもつれたりした。七夕笹のト
ンネルが出来上る、何処の一番
良いのか見て廻つたりした。
日没から近所の露地で老人連中
の盆踊りが始まる。けいこ踊り
であるが、これを「七夕踊り」とい
みじくも聞いたことがある。八日

盆祭り

墓掃除

大い八日又は十日に行う。九
の日をさけていた。鎌、帚、花、
線香、水桶を提げて行く「やせ犬
が先きに立つ也墓掃除」夏草が身
の丈に伸びている。藪蚊に攻めら
れながらの清掃である。草いきれ
と暑さに苦しめられてダウンしそ
うになる。除草を束ねて焼いて、
改めて、竹筒に花、線香の煙りが
特有の臭いがする。

仏具磨き

十日は老祖母が主役、縁側で真
鍮金具を灰でせつせと磨く、忽ち
びかびかの金色となる、仏壇の中
も見違えるように美しくなる。新
仏のある家では、提灯がうす高く
重なる程届けられる。中元品も床
の間に積み重なる。縁側につるす
準備で釘を打つたりは祖父の仕事
であつた。

十二日

小さな玩具のような塗り膳に仏
事用の食物が供えられる。軒の提
灯も真新しい岐卓提灯と変る。仏
壇の真菰が香ぐわしい。父母にせ
つかれて仕方なしに仏前で手を合
わせた。暑い／＼裸になりたいが
浴衣は脱がせて貰えなかつた。

初盆の家

珍らしいのは杉の丸太か竹竿の
五米位の尖端に家形の灯籠がつる
され、夜になると火が入った。八
月になると直ぐ建てられていた。
訳は新仏の霊が迷わずに家に帰つ
てくるための目印と聞いた。宗旨
によつてであろう。十三日、夕方、
打水した玄関に洗面盥に水が一
杯、新しい手拭も添えて置く。日
没近く、表玄関先きで「お迎え火」
といつてコウゾの枝を焚く。「み
たま迎え」という訳、三米もあり
そうな提灯が縁側に数個つるされ
る。仏壇の前は供物と提灯で身動
きも出来ない。吊問客がひっきり
なしに続く。老人連中の服装が城
下街は一定していた。麻かたびら
か、小倉縮に紺の羽織、珠数片手
に白扇を持ち、白足袋姿でやつて
きた。

盆踊り

日没、少し暗くなりかけると近
郷近在の若者連中の集団が盆踊り
にやつてくる。表通りで円陣を作
つて踊る。揃いの浴衣もあれば類
冠りの者もある。種々雑多の集まり、
「長者口説き」「鈴木水水」
最後は「能行口説き」であつた。
踊りがすむとラムネ、サイダーの
接待、干菓子及寸志が出される。
家によつてウチワを一本宛、又は
手拭が配られた。夜の更けるまで
次から次へと来たものである。深

夜、近親縁者や遠縁の者の盆踊り
も披露されたものである。

十四日

午前中はグロッキー、家族一同
遅くまで眠りこけていた。午後
になると忙がしい。夜は十三日よ
りも大忙しであつた。

十五日

精霊送りである。仏前に白木の
西方丸が置いてある。これに仏前
のお供物、故人の好物等を積み、
ホーズキ提灯をかざり、夜八時過
ぎから家族一同に見守られ、近親
精霊送りである。仏前に白木の
西方丸が置いてある。これに仏前
のお供物、故人の好物等を積み、
ホーズキ提灯をかざり、夜八時過
ぎから家族一同に見守られ、近親



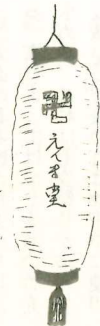
縁者や故人の友人がこの西方丸を
肩に紫川に向う。川岸には数十隻
の西方丸が集る。船を雇つて響灘
まで行く家もある。川岸から静か
に西方丸は流される。近親の改め
ての悲しみよりも、周囲はお祭り
騒ぎであつた。これを精霊送りとい
う。普通の家では真菰に包んで
流す家も多かった。これは川下に
人が居て拾いあげて処分していた
という。農村では麦わらで西方丸
を作っているのを見たこともあ
る。精霊送りの人々は家に帰り一

杯酒肴が出る。これを精進揚げと
称した。

長浜のエンマ様

「地獄の釜の蓋も開く」といわれ
る十六日は休息日。この夕方から
長浜町エンマ堂で祭りがある。城
下街の人々は、お盆三日間の忙し
さから解放され、夕涼みを兼ねて
盆踊り見物であつた。狭い中の町
の露地は露店と人々で身動きも出
来ない。線香の煙りでお堂は息も
つけない位。赤い衣を着たエンマ
様が活と口を開いて大きな目玉で
にらみを効かしている姿は幼い子
供には恐ろしい存在、泣き出す子供
供に更に賑やかとなる。勸善懲惡
の地獄・極楽の絵図が人目を引
く。お盆に貰つた小遣で縁日店か
ら色々の物を買うのが最高の楽し
みであつた。

長浜のえんま祭り



小文字焼き

新しい行事、昭和二十二年八月
十六日、元小倉市長浜田良祐さん
が上京の途次、京都の大文字焼き
を見てヒント、小倉の小の字焼
き。理由は戦争で護国神社に祠ら
れし人以外、名もなき市民が人知
れず戦火の犠牲になった人々の供

養を兼ねての火祭り、年々盛大と
なり、十三日の迎え火として知ら
れてきた。

線香山祭り



小文字焼き

正しくは「地藏盆祭り」で二十
四日夕刻から行われる。京都と岡
山と小倉が盛大との話。地藏菩薩
は現世と冥府との仲継ぎ役、又子
供育ての加護仏として信仰厚い人
々の仏さま。城下町では、鍛冶町
長浜、平松、清水、金田の観音及
地藏堂が代表、奉納のセンコウが
多く並の線香立てではあふれるの
で地藏堂前に四立米位の砂盛りを
して、この砂にセンコウを立てる
ので「線香山」と称された。庶民
の知恵である。文豪森鷗外博士の
小倉日記の一節にいみじくも表現
されてなつかしい。金田町観音堂
での線香山は特異の言葉が残って
いて、城下町の床しさを偲ばせて
くれる。幼児達は行水後、小ざつ
ぱりした浴衣、女の子の帯も美し
い花模様振りの袖、首筋に天瓜粉
が真っ白。連れ立って各家を訪れ



線香山

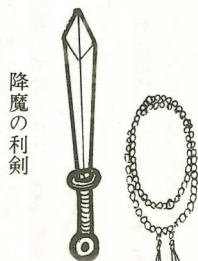
「センコウノカンジン 一本オク
レ(線香の勧進一本おくれ)」ま
ことに城下街にふさわしい名残り
の古い言葉である。家人から玄関
で用意の線香をそれぞれ数本宛下
さる。「おお、あっぱいこと、か
しこいなア」と誉められると、小
さな口元がほころびる。精一杯の
笑顔を見せるあどけなさである。

時にはお小遣いを
貰う家もある。こ
の線香を両手に捧
げて地藏堂にやつ
てくる。砂山は線
香の林立で一杯、
もうもうたる煙り
で向う側の人の姿
も定かでない。接
待係の人から干菓
子を貰つて食べる
境内はボンボリと
提灯が数十個、表
通りまで美しい火
祭り、やがてマイ
クが近代民謡、盆
踊りを放送する。
老幼男女が輪にな
つて踊り始める。
やつと歩き始めた
幼子も、見様見真
似で仲間入り、一
大盆舞踊祭となる。
十一時も過ぎると
今度は古い盆踊り
が老人連中披露
される。勿論口説きは「能行口説
で、「年はとつても声には年をと
らぬ」と自慢の美声であつた。「あ
の声で若い時は、さぞ女を迷わせ
ただらう」とひやかしの一幕もあ
る。

お不動さま

八月二十九日は、お不動様であ

風鎮祭



降魔の利剣

る。大いの寺には入口に牙をむ
き出しの形相の恐い仏様が立って
居られる。破邪の剣を持って悪魔
を捕える繩、背中には紅蓮の炎、
子供にとつては恐い仏様である
が、この日が仏教でいう盆踊り最
後の日という訳。清水観音寺では、
夜更けまで踊り好きの音頭が聞こ
える。慈悲の珠数

八月三十一日と九月朔日の二日
間、全国各地、農山村、津々浦々
まで行われる祭り。神社は、貴船
社か天疫神社が主祭場。九月一日
か二日が農家の厄日で、二百十日
の前夜、とかくこの頃が台風の時
節。稲が身持ちか開花期、台風に
より半歳の苦勞も水の泡、切ない
願い、風くるな、風鎮祭、大雨も
いりません。所謂神頼み、平和な
朝夕となつても、稲の害虫発生、
これ又一大事、今でこそ害虫発生
は薬品で退治できるが、一と昔前
までは不可抗力に近かつた。そこ
で害虫殺しの火祭り「飛んで火に
入る夏の虫」という訳。先ず八月
三十一日は朝から若者の手で雑木

や枯木で井楼が組まれる。タイマ
ツも数十本用意、境内には提灯、
ボンボリが建てられる。露天商も
参道に店を構える。夕刻より神官
を中心に老人、世話人、村人老幼
男女が集まり、祈願祭執行、終つ
て境内の井楼に点火、ぐらぐらつ
と燃え上る。若者たちは手に手に
タイマツを捧げ、列をつくつて境
内を一巡、参道より田の畔道を一
散に走り始める。所謂、虫追祭り
「実盛さまのお通りじゃ、手塚の
太郎が打ちとつた。小ヌカ虫も
お供せい、あと富貴栄え〜」
と音頭とりながら走ると、小学校
五、六年生も真似して若者の後に
つづく。夕間にタイマツの動きが
怪しく狐火のように或は幻の如く
またたく。境内では火柱が天を焦
がすが如く高く舞い上がる。火粉

虫追タイマツ



が花火のように美しい。昔は実盛
人形を火に燃したと古老が話して
いたが、見たことがない。とにか
く、夏休み最後の火祭り、フィナ
ーレという風鎮祭である。城下街
は郊外の篠崎の貴船社が盛大であ
つた。
・小倉祇園は別の機会にゆずつた。

キリシタン成敗

小倉北区 吉田 美智子

慶長十七年(一六一二)徳川幕府はキリスト禁教令を發布し、翌十八年(一六一三)にはその範圍を全国にひろげた。

細川忠興は国許の重臣に書状を送り、郡奉行に命じてキリシタンを書き出させ、くるす堂、パテルンの墓を破壊させるとともに弾圧にのりだした。

寛永元年(一六二四)細川藩「日帳」にはキリシタン成敗の記録がある。

九月十七日

一、吉田少右衛門登城二而、森田喜右衛門と申者きりしたん二而、ころび候様二と色々いけん申候へとも、ころひ申事成かね申由書物仕候二付、せいはい仕由被申候、然処彼者刀・ワキざし御座候をけつしよ物二成、持參被申候、きりしたんの右之刀・ワキざし、則けつしよ奉行へ渡し可有之由候事、道具をも見せ被申候、此道具ハ少右衛門あつかり置申候間、其御心得候て可被下候由二候事

廿七日

一、田川郡助兵へ水せめ被申付候へ共、一昨日ノ糺明二少も無相違

申分二候則書物御座候事

小倉市誌補遺によると寛永元年(一六二四)十一月一日には一名斬殺されているが、氏名は定かでない。

慶長十四、五年(一六〇九—一〇)には小倉に十人の宣教師がおり、受洗者二千人を数えていたが、幕府の禁教政策に迎合し、信徒への迫害が激しく、小倉藩も殉教の血でいろどられた。

続々郡書類に契里斯督記が収められ、同記に、吉利支丹寺、日本に有之候所々は長崎・大村・深堀・有馬、筑後の柳川、肥後の八代、天草、豊前小倉、筑前博多、周防岩国とある。

小倉に切支丹寺があったことはたしかであるが、これを裏づける資料は残念ながら見出してない。

細川氏に代つて寛永九年(一六三二)小笠原忠貞が小倉に入部したが、切支丹は愈々固く禁止され、信者も次第に消滅したと思われる。

切支丹に関する遺物、遺蹟は江戸時代に入って幕府の禁教政策が徹底した結果、隠蔽し抹殺され、

ために切支丹史料の蒐集は困難を極めていたが、貴重な資料をひとつでも発掘したいものである。

地獄極楽図

小倉北区 徳田吉松

小倉北区長浜にある閻魔堂に、古い地獄極楽の図がある。私は小さい時分からこの図を見ている。

毎年、お正月の十六日とお盆の十六日に、御開帳があった。

今年のお正月に案内を受けて、久しぶりに御開帳を見に行った。

今も、お正月とお盆と、矢張り十六日に御開帳をしているという事であった。

この地獄極楽図が、文化財として値打のあるものかどうか、私には分らないが、小さい時から見て来たなつかしさもあって、通信して見る気になった。

久しぶりに見た地獄極楽図は、六十年前に見たのと殆んど変わっていない。極楽の図に惜しみなく使っている金泥の輝きも、地獄の図の紅蓮の炎や悪魔羅刹に塗られた気味わるい位濃い赤や青の色も、前に見た時と少しも変わっていない。

ただ、画面の幅が、いくらか狭くなっているように感じた。それから、前に見た時は、もつと古び

た表装であったように思った。或いは、其の後表装を仕直したのではあるまいか、そして仕直すときに、図の周りの傷んだ部分を多少切り除けたのではあるまいか、などと考えて見たりした。

閻魔堂を管理している人に、其の事を言つて見たが、そうですかと言っただけで、くわしくは分らなかった。この人は、たしか六、七年前に、管理を引継いだのである。

地獄極楽図は双幅で、一幅の画面の広さは、百五十七センチに百二十七センチ位である。

極楽図は、釈尊を中心にして、大曼陀羅が極彩色で描かれている。地獄図は、閻魔王を中心に、三途の川や針の山や、等活、叫喚、焦熱、無間など八大地獄が、これも極彩色で描かれている。極楽図に乙卯暮冬日村田成成写と、落款がある。

村田成成については次のように伝えられている。成成は、本名村田正輝、文化十三年(一八一六年)京都で生れた。父は九条家に仕えた村田彦右衛門である。成成は若年から、絵を、山田忠孝の子成震に学んだ。弘化三年(一八四六年)小倉藩の京都留守居役をしていた西田直養にすすめられて、小倉に永住する事になった。成成は、明治十年六十一歳で死んだが、小倉在住三十年の間に、多くの作品を

遣した。神社の大絵馬や天井絵、幕末小倉百景などを描き、愛好者のためには花鳥を描いた。

閻魔堂の地獄極楽図も其の一つで、安政二年(一八五五年)成成三十九歳のとき描いたものである。

幕末から明治、大正、昭和と、日本の最も波瀾の多かった百二十年間、特に変動のはげしかった小倉の一隅に、ひっそりと保存されたこの図には、何か物語られているように、私には思われるのである。

お堀端風物誌

小倉北区 綿森利雄

紫川の九軌電車通りを渡り西に向うと左側に巾八間のお堀が深々と水をたたえている。石垣の奥は将校集会所と小倉市役所で東面は広い庭園に囲まれている。室町電停を過ぎると小倉警察署及官舎、衛戍監獄跡の広場、続いて十二師団憲兵分遣隊のいかめしい黒黒の建物が控えている。その黒板塀を回り南へ入ると広い三叉路である。道の中央は北の丸、堀の北西角に当りテニスコートと斜に切つた位の通称三角広場といつて草に覆われた格好の遊び場になっていた。だがその底辺に当る西側は歩兵第十四連隊兵器庫庫正門が厳として控え、門柱左に白ペンキ塗の番兵小屋があり交代時間ともなれ

ば規律正しい捧筒の儀礼で申送り事項伝達を長々としていた。身のしまる思いがしたものだ。南へお堀端に沿って行けば二間余の雑草に被われた土手に囲まれて兵器庫の赤レンガの窓の少ない古びた建物が次々に棟を並べて仰がれる。

掘手門附近迄行く間は左右の伸草小枝が前方をさえぎり寂としてむしろ恐ろしい所である。お堀の崖削には松、杉、藤、ハゼ、など不規則に立並び下草も小児の背丈程伸びていて水面も処々でしか望見出来ない状態だ。蓮の浮葉、菱の照葉の模様の間を水面近く目高の一群を見付けるのが大自然にふれたように楽しい。鮎も大きくなっているだろう。全く静寂そのものだ。石垣の処々につわぶきの一帯が見られる。間もなく黄金色の花が点々と見られるのだ。北の丸は師団司令部の真裏に位置するので将校乗馬の厩舎があるらしい。

紫川縁下屋敷跡は師団長官舎でありいかめしく前庭を控えて望見出来る。正門前が桜並木で左はお堀跡のお堀が庶民も近付けない無気味さで一面の水草で光っている。突き当りに北の丸へ昇る不開の門が藪を通して見えるのみ。下台所跡は種々雑多な大木、下草に覆れた一面の藪である。「椎の実があるぞ」上からの声に見上げる

と暗い天枝を背に弟が叫ぶ、「蛇が居るぞ用心せい」と私は大声を

返す。落ちていた椎の実を少しは懐に入れたようだ。その瞬間、「パン!!」と内臓が吹飛んでしまったような衝撃を受けた。二人共声を飲む、「アッ昼や帰ろう」。期せずして木の間かくれに城跡の石垣を静かに見上げていくと頂きにポツカリと秋の碧空が何もなかった様に広がっていた。

大正八年頃迄お堀跡で午砲(トーン)を毎日全市に正午を知らせていた。大正十年前後まで北方歩兵第十四連隊より下士官が模範兵卒数名を営外引卒し毎日定期出発。香春口、陸軍橋を過つて城台地上り設置野砲二門中の一門を使用、正確を期する為ウォルサム時計の長針をにらみながら空砲を発射していた由である。

たまたま小倉城調査報告書に接し近郊に育つた私にとつてかすかに残る記憶をたどつてみた。古昔の感というが六十年間の大きな変容は驚愕するのみだが心の奥に無形有形のなつかしい残像として一生消えないだろう。

小倉北区内の文学碑

小倉南区 今村速男

市内には、いわゆる文学碑が数多く建立されている。その中で、



小倉北区古船場町安全寺境内 無法松之碑

代表的なものについては、かつて朝日新聞北九州版に、「いじぶみ」として、そのほとんどが連載された。執筆は筆者である。今回は、小倉北区内にあるものについて、簡単に述べてみたい。

全国的に著名なものとして、市庁舎に近く、紫川畔にある、鷗外文学碑がある。小倉駅前、鷗外町住宅跡に建つ予定の文学碑が、なかなか実現しないので、この碑が、鷗外小倉在住を記念する唯一のものといえよう。昭和三十七年十二月、谷口吉郎工博の設計によって建立された。同じく谷口氏の設計になるものに、延命寺・手向山公園にある佐々木小次郎碑がある。小説「佐々木小次郎」の原作者者村上元三氏の建立で、碑の表面に氏の俳句「小次郎の肩涼しければくらめ」が刻まれている。昭和二十六年建立。古船場の安全寺

境内に「無法松の碑」がある。岩下俊作氏の「富島松五郎伝」を記念して建てられた。昭和三十三年建立。

歌碑の中で、ユニークなものは新勝山公園内の「万葉の庭」であろう。北九州市内に関係のある万葉の歌が六首、古写本によるものと、活字体のものと、それぞれ二基つづつ建っている。すべて自然石に歌が刻みこまれている。中には五十トンを超す巨大なものがあるが、周囲の造園が、今一つもの足りない感じがする。昭和四十六年建立。長浜の貴布弥社内にも万葉歌碑がある。

豊国の企救の長浜ゆきくらし日の暮れぬれば妹をしぞ思ふ

昭和四十四年十二月、久保田瑞一氏の建立。字も氏によるものである。古いものでは、妙見の御祖神社境内の「織錦翁奇魂碑」がある。

俳句関係のものでは、上富野の延命寺境内に「古池や……」の芭蕉の句碑がある。弘化四年建立。清水観音内に「蕉翁」の二字を刻みこんだ芭蕉塚、安国寺境内の柳墳などがある。建立年代は新しいが、広寿山に、西山宗因の句碑、いざ桜われもそなたの夕嵐がある。裏面は鍋山宗匠の句である。昭和四十四年鍋山正軒建立。近代俳人では、到津遊園内の河野静雲句碑

発心は悲し勇ましほととぎす八坂神社境内の丸橋静子句碑。月仰ぐ一途に生きし来し方よ俳誌「浚柿」の主筆野村喜舟氏の鶯や紫川にひびく声

の碑が篠崎八幡境内にある。現代俳句の代表者横山白虹氏の夕桜折らんと白きのと見する句の碑は御祖神社境内にある。俳句で淋しいのは、かつての女流代表作者・杉田久女・橋本多佳子のもので、市内に無いのは、まことに残念である。

異色な存在として、足立山中腹の阿南哲朗民謡碑も忘れてはならないもの一つである。